



怖くなる、花の絵

松本 侑壬子・ジャーナリスト

お化けの絵の話ではない。その逆。美しい花や果物や木をあまりの迫力で描くので、見てみると画面が動きだし、心がざわめき爆発しそうになるのだ。描いた本人まで「実は、私も怖いの」と言っている。

セラフィーヌ・ルイ (1864年～1942年) は、パリ郊外のサントスで家政婦をしながら独学の絵を描き続けた素朴 (ナイーブ) 派の实在の画家である。一生独身のまま、貧しく孤独な 78 年の生涯の、最後の 10 年余りは精神病院に入院したままだった。

この映画は、そんなセラフィーヌの内面に煮えたぎる創造の欲求とキャンバスに塗り込めた魂の輝きを見出した、ドイツ人画商ヴィルヘルム・ウーデとの 30 年にわたる宿命的な絆の物語。ウーデは、同様に無名時代のアンリ・ルソーを世に送り出した優れた美術家であったが、自分自身も時代の波に翻弄されながら、セラフィーヌの絵を発見し、保護し、世界へ広めていく劇的な生涯を送った。

二人の出会いは、セラフィーヌ (ヨランド・モロー) が働く家にウーデ (ウルリッヒ・トウクール) が妹のアンヌ・マリーと引っ越してきたのがきっかけ。牛のように黙々と働く大柄な家政婦くらいにしか思っていなかったセラフィーヌの優しさや自然に対する深い知恵に気づくウーデ。そ

して、家の女主人が開いた夕食会で、偶然目にしたセラフィーヌの絵に衝撃を受ける。子どもの絵よりひどい、とけなす女主人とは逆に、セラフィーヌに絵をもっと描くよう励ます。初めはからかわれていると反発したセラフィーヌだったが、ウーデの援助で自由に画材を買い、作品を次々に仕上げていく。貧しくて絵具さえ手作りだったセラフィーヌのうれしさ。

だが、第一次世界大戦の勃発でウーデは敵国人としてフランスから追放、画商としての私財も没収されるなど壊滅的な被害を被ってしまう。セラフィーヌは戦時中も変わらず家政婦として働きながら絵筆を持ち続け、戦後、サントスの市役所で開かれた展覧会には大作が出品された。フランスに戻って来たウーデは、内容の深まったその作品を見て、再び援助を約束する。

セラフィーヌは、広い部屋でふんだんに画材を使い、心に湧き上がる情熱のままに大きなキャンバスをぐんぐん彩っていく。アトリエの見物人も増えた。初めて人に認められ、称賛される歓び、そして初めて知る贅沢の味。だが、折しも 1929 年、世界大恐慌の波はウーデの仕事にも及び、もはやセラフィーヌの散財を許すことはできない。だが、彼女は聞く耳をもたず、ひたすらウーデを恨み、傷つくばかり。2 人の間に亀裂が入り、セラフィーヌの無垢な神経は壊れていく…。

天才画家といっても外観は普通のおばさんで、黒っぽい洋服に三角のショール、手でカンカン帽子を押さえながら別の手には大きな籐かごを持ち、広い草原を横切って通勤する家政婦。辛うじて自分の食いぶちは稼ぐ 100 年前の“おひとりさま”だが、魂の自由は満喫できたに違いない。それだけに、晩年の精神病院で反抗して自由を奪われる無残な場面では、涙がこぼれる。

『セラフィーヌの庭』

仏・独・ベルギー合作映画 (126 分) / マルタン・プロヴォスト監督

8 月 7 日 (土) より岩波ホールほか全国順次公開

©TS Productions/France 3 Cinéma/Climax Films/RTBF 2008

